

貝原益軒に関する年表<sup>(37)</sup>

元号（西暦）等	年齢	事項	著作
寛永 20(1643)	14	<p>文字を知ること漸く多し。試に人扁木扁水に等に屬する暗記の字を書すれば、各扁概ね百餘字に及べり。父寛齋兼ねて醫藥の事に通ず。故に従うて薬性及び食物の性を知る。且つ醫學正傳、醫方撰要、萬病回春等の書を読み、粗ば醫藥の事を知る。此歳父寛齋故ありて知行所を失ふ。適々仲兄存齋京都の遊學より歸る。冬出で、福岡の荒戸新町に居り、仲兄存齋に従うて四書を読む。是れ經典を読むの始なり。幼にして浮屠を崇むことを知り、毎日佛經を誦し佛號を念じ、毎月佛忌に當れば、素食して禮拜するを例とす。仲兄存齋教ゆるに佛の崇ぶべからざるを以てす。乃ち過てるを知りて棄て、終身また佛を好まず。是より始めて聖人の道尊ぶべきを知り、深く之を信ず。除日父寛齋に従うて井原に歸る。（益軒会編 a 6）</p>	
正保元(1644)	15	<p>春また福岡に出で、仲兄存齋に従うて書を読む。夏移りて藥院に居る。冬父寛齋公事を以て初めて江戸に赴き、留ること四年な</p>	

		り。臘月また井原に歸る。 (益軒会編 a 6)	
正保 2(1645)	16	春正月井原を出で、薬院に居り、夏移りて春吉に假居し、数日の後また唐人町に移る。(益軒会編 a 7)	
正保 3(1646)	17	荒津山の下に移る。始めて小學を読む。また高橋氏に就て和禮を学ぶ。(益軒会編 a 7)	
正保 4(1647)	18	春正月、父寛齋江戸より歸る。伯兄家時志摩郡小金丸に移り、仲兄存齋は出で、豊後の日田に居る。季兄義質と同じく家にあり。義質は即ち樂軒なり。(益軒会編 a 7)	
慶安元(1648)	19	夏五月三日、祖母八木氏を喪ふ。父に従うて江戸に赴く。是れ東行の始まり。(益軒会編 a 8)	
慶安 2 (1649)	20	春三月江戸より歸る。夏公宅に於て元服を加ふ。 (益軒会編 a 8)	
慶安 3(1650)	21	春正月底井野より歸る。夏に及び隔日交番して、城中の南殿に宿直す。冬父寛齋江戸より歸る。 (益軒会編 a 8)	
慶安 4(1651)	22	初めて近思録を得て之を読む。是れ近思録始めて我國に舶載せしより、猶ほ多く年月を閱せざる時なり。(益軒会編 a 9)	

承應元(1652)	23	冬父寛齋また江戸に行役す。 此歳東軒夫人江崎氏生る。(益軒会編 a 9)	
承應 2(1653)	24	冬移りて博多に居る。(益軒会編 a 9)	
承應 3(1654)	25	國主忠之館を捐て、世子光之後を承く。 夏四月、博多より福岡に歸り住む。六月に及びて痰を患ふ。冬長崎に遊ぶこと二回、多く書を讀む。 此歳寛齋江戸より遙に請ひ、家督を三男義質に譲り、己は隱居薙髮し、猶は江戸に留りて後廷に仕ふ。寛齋は此時以後の名なり。(益軒会編 a 10)	
明暦元(1655)	26	春また長崎に遊ぶ。 三月、東遊して父寛齋の老を扶養せむと欲し、海路大阪に出で、膽駒山を越えて奈良の名勝を探り、京都に留ること十餘日の後、歷程して江戸に入る。 是時に方り、醫と為るの計方に決す。乃ち江戸に入るの前日、川崎の驛舎に於いて髪を削り、始めて柔稱す。 是より父寛齋と居を同うして江戸の藩邸にあること一年半、黒田一貫以下	

		諸重臣の眷遇を蒙る。また数々幕府の儒員林鷺峰を訪ふ。(益軒会編 a 10)	
明暦 2(1656)	27	<p>歳首の七絶一首を作る。此れ詩を作るの始なり。冬十月、父寛齋に従うて江戸を發し郷に歸る。途次伊勢の大廟を拜し、京都に入りて留まること二日。郷に歸るの後、父寛齋全く致仕す。</p> <p>此月始めて國主光之に仕ふ。俸米六人扶持を賜ふ。また始めて光之に謁す。(益軒会編 a 10-11)</p>	
明暦 3(1657)	28	<p>春三月二日、始めて大學の序を講ず、蓋し經を講ずるの始なり。此月七日、京都遊學の命あり、同時に仲兄存齋致仕す。</p> <p>四月朔、海路郷を發し、大阪を経て京都に入り、安樂小路上町に居り、次いで西洞院に移る。此月始めて松永尺五及山崎闇齋を訪ふ。</p> <p>夏六月二日、松永尺五簀を易ふ。往いて殯葬の事に與る。此月始めて木下順庵を訪ふ。</p> <p>秋七月、始めて闇齋の序を講ずるを聞く。是より常に闇齋の講を聞く。(益軒会編 a 11)</p>	

萬治元(1658)	29	<p>春二月十日、始めて大學を講ず。是月山崎闇齋江戸に下る。三月十二日始めて論語を講ず。九月堀川に移る。痰火を患ふ。此頃絶えず順庵の講に赴く。順庵また數々來り訪ふ。向井靈蘭と相交り、情誼漸く密なり。</p> <p>冬十月仲兄存齋江戸に赴くの途次、來り過ぎる。十一月十六日伏見に於て國主光之に謁す、酒二樽を賜ふ。(益軒会編 a 11-12)</p>	
萬治2(1659)	30	<p>三月二十二日、また伏見に於て國主光之に謁す。光之その善く學業に勤むるを賞し、時服二領及び書十一部を賜ふ。出京以來力學勤めて懈らず、或は通宵寝ねざるに至る。冬俸禄十石を加賜せらるゝの命あり。(益軒会編 a 12)</p>	
萬治3(1660)	31	<p>春正月七日夜禁裏に詣り龍顔を見て仰ぐ。</p> <p>此月二十二日、初めて小學を講ず。此頃より松下見林と親しく交る。冬十月東行の命あり。十一月江戸に赴き、居ること四月。(益軒会編 a 12)</p>	
寛文元(1661)	32	<p>京都に行く。農学者宮崎安貞らと交流する。(福岡市博物館・特別展示解説)</p>	

寛文元(1661)	32	<p>春二月林春齋の易啓蒙を講ずるを聞く。</p> <p>三月藩の宰臣立花勘左衛門重種に従うて西歸し、有馬の温泉に往いて留ること二十一日、勘左衛門の爲に小學を講ずること日に三回、講を卒りて直に歸京、安樂小路に居る。</p> <p>小學句讀、孝經、大學章句及び論語集註の上を講ずること日に一回、此歳小學を反覆して講ずること三回に及ぶ。(益軒会編 a 12)</p>	
寛文 2(1662)	33	<p>春論語集註の下を講じ、夏始めて孟子の序を講ず。</p> <p>夏四月歸藩の命あり、翌五月朔京を發す。京に在ること六年、始めて歸省す。</p> <p>秋八月二十八日、俸米拾石を加へらるゝの命あり、前後合せて三拾石。</p> <p>九月晦、國主光之の東勤に従うて發し、山陽の舟中君前に書を講ず。大阪を経て京都に入り、重ねて安樂小路に居る。冬始めて中庸を講じ、また孟子を講ずること朝夕二回なり。是時に當り聲譽漸く加はり、來りて講を聞</p>	

		く者頗る多し。(益軒会編 a 13)	
寛文 3(1663)	34	<p>春二月移りて上立賣町の北側に居る。</p> <p>此春始めて近思録を講習し、且つ典故訓詁を考證す。我國に於て近思録を講ずるは之を始とす。又小學、孝經、大學の諸書を講ず。秋八月居を西大路藏貫宗雲の邸に移し、住むこと三月の後、また谷村藏屋敷の内に移る。</p> <p>(益軒会編 a 13)</p>	
寛文 4(1664)	35	<p>春二月歸藩の命あり、翌三月福岡に歸る。途次風浪に逢うて兵庫に寄泊し、往いて湊川に楠公の墓を拜す。自ら碑を立てむと欲したるは此時なり。</p> <p>此月居を鳥飼に移る。翌月に及びて命あり、邸宅を同じく鳥飼に賜ふ。</p> <p>夏五月二十三日命あり、始めて知行百五拾石を賜ふ。此月藩の士太夫の爲に三たび大學を講ず。</p> <p>秋九月晦、國主光之の述職に従うて發し、十月江戸に入る。</p> <p>十一月幼君に侍し小學を讀む。此月始めて幕府の儒員土岐長元と相識る。</p> <p>此歳姪市之進生る。即ち</p>	

		好古なり。(益軒会編 a 13-14)	
寛文 5(1665)	36	三月十四日、江戸を發して京都に入る。四月入江殿辻に移る。 冬十二月三日、父寛齋卒中を病んで福岡の家に逝く、享年六十九。(益軒会編 a 14-15)	
寛文 6(1666)	37	春正月八日京都を發して喪に奔る。福岡に歸り即日二十日掃展して哀を致す。 十月朔先づ發して京都に入り、留ること十餘日の後、往いて江戸に到る。 (益軒会編 a 15-16)	
寛文 7(1667)	38	春閏二月十九日、江戸を發して京都に入る。 冬十月大和に遊び、奈良泊瀬を巡覽すること三日にして歸る。(益軒会編 a 16)	
寛文 8(1668)	39	九月東行國主光之の述職に従ふの命あり。光之に先だつて發し兵庫大阪を経て京都に入り留ること十餘日、冬十一月江戸に入る。叔兄樂軒行を同うす。 また往年京都にあつて、近思錄を講ずる頃、先儒の言説を標注し、且つ間々自ら發明する所を加へて梓に上せ、名けて近	



		思録備考と云ふ。今年に至つて彫鐫功を終ふ。(益軒会編 a 16-17)	
寛文 9(1669)	40	<p>春三月、顧諟抄を著はす。</p> <p>此月六月江戸を發し、途次金澤鎌倉江島の勝概を歴觀して京都に入り、留ること四月、秋七月に及んで福岡に歸る。乗る所の船暴風雨に逢うて甚だ危し。久野正的また之に従ふ。此月始めて東軒夫人の故里秋月に遊ぶ。</p> <p>冬十一月廿五日邸宅を荒津の東濱に賜ふ。往年京都にあつて小學を講ずる頃、先儒の言説を纂輯して標注し、且つ間々自ら發明する所を加へて、小學句讀備考を題し、曾て梓に上す。近思録備考と並び稱せられ、汎く世に行はる。然れども自ら校正せざるの故を以て、誤謬牴牾頗る多し、近來訂正の意ありて果さず。(益軒会編 a 17-18)</p>	
寛文 10(1670)	41	<p>春二月七日、去年冬賜ふ所の荒津東濱の邸宅に移る。是より身を終はるまで居を轉ぜず。(益軒会編 a 18)</p>	
寛文 11(1671)	42	<p>春三月、請うて京都に遊び、柳馬場に居る。久野正的之に従ふ。</p>	

		<p>秋七月福岡に歸る。久野正的船中より痢を患へ歸つて世を棄つ。歳僅に二十、就て學ぶこと七年。天資聰明にして學を好み克く勤め前途頗る望あり。故に哀憫子を喪へるが如し。</p> <p>九月、文庫を作る。</p> <p>冬十月五日、始めて黒田家譜編纂の命あり。(益軒会編 a 18)</p>	
寛文 12(1672)	43	<p>秋命あり、江戸に赴いて世子忠之に侍せしむ。國主光之の親族曾津侯保科肥後守正之の勸に基くと云ふ。九月福岡を發し、京都を経て冬十月江戸に入る。桑名より舘田に航する時、風波大に悪しく、危して纔に免る。</p> <p>冬十二月二十一日、地形婆の訃福岡より到る。同胞四人を子養したる乳母なり。(益軒会編 a 18-19)</p>	
延寶元(1673)	44	<p>春二月二十九日、江戸を發し、三月九日、京都に入りて留ること月餘、夏四月福岡に歸る。(益軒会編 a 19)</p>	
延寶 2(1674)	45	<p>秋九月國主光之に随うて東役す。冬十月、京都に入り、十一月、江戸に到る。(益軒会編 a 19)</p>	

延寶 3(1675)	46	三月命を奉じて世子綱政に侍講す。此月綱政目黒の別邸に遊ぶ。(益軒会編 a 19-20)	
延寶 4(1676)	47	此歳小學、四書、近思録、五經、大學衍義の洋文を纂め、且つ講義二卷を作る。(益軒会編 a 20)	
延寶 5(1677)	48	近思録、千字文、千家詩、古文眞實後集、武經七書の訓點を訂正す。(益軒会編 a 20)	
延寶 6(1678)	49	夏和漢名數成る。また古今詩選を編む。(益軒会編 a 20-21)	
延寶 7 (1679)	50	肥後国の杖立温泉へ行く。(福岡市博物館・特別展示解説)	『杖立紀行』、『伊野大神宮縁起』、『初学詩法』、『増福院祭田記』
延寶 7 (1679)	50	主な夕遊観地:杖立温泉、英彦山(溝口 371)	『杖立温泉』
延寶 7 (1679)	50	春三月往いて肥後の杖植温泉に浴すること凡その日、途次英彦山に上る。帰つて杖植紀行を作る。冬十二月八日、自ら五十の壽を賀し、家に客を饗す。此歳伊野太神宮縁起を作る。真字仮字各一篇あり。初学詩法成る。自ら詩を賦するを好まざるも、國人詩を作るを喜んで、而かも法を知らざるを嘆じ、諸家の詩話を纂輯して之を編む。増福院祭田記また成る。(益軒会	

		編 a 21)	
延寶 8(1680)	51	五月有馬を出で、武庫山に上り、大阪に出づ。此歳本草綱目目録和名成る。(益軒会編 a 21-22)	
天和元(1681)	52	三月出で、東郡の勢田黒崎田嶋に遊ぶ。(益軒会編 a 22)	
天和 2(1682)	53	此歳頤生輯要成る。(益軒会編 a 22-23)	『頤生輯要』
天和 3(1683)	54	春三月國主光之に後る、こと一日、江戸を發し、往いて伊勢の大廟を拜し、大和の吉野山に遊び、猶ほ處々を巡覽して京都に入り、留ること二十日。夏四月大阪を經五月福岡に歸る。(益軒会編 a 23-24)	
貞享元(1684)	55	春二月幕府旨を下して黒田長政の戰功事歴を徴す。乃ち旨を奉じて三月江戸に入る。 夏四月十九日、江戸を發し、美濃を過ぎりて關原の古戰場を覽、また播州の諸郡を歴遊し、黒田氏發祥の地を窮めて五月に福岡に歸る。 冬十月十六日福岡を發し、十一月、江戸に入る。 此歳大學新疏成る。(益軒会編 a 24)	

貞享 2(1685)	56	春三月十五日、江戸を發して先づ日光山に遊び、足利學校を觀、妙義山に上り、中仙道に出でて西行し、東近江より越前の敦賀に遊び、西近江を歴て夏四月京都に入り、留ること五十餘日、六月、安藝の嚴島を過ぎりて福岡に歸る。此行得る所の詩凡そ五十首、名けて西歸吟稿と云ふ。(益軒會編 a 24-25)	
貞享 3(1686)	57	秋七月東照宮の鳥居の銘を撰す。 冬十月下座郡及び筑後に遊び、高良山に上る。また直方に遊ぶ。 冬十一月九日、姪好古三宅氏の女を娶る。(益軒會編 a 25)	
貞享 4(1687)	58	夏六月黒岩慈庵江戸より下り、福岡に留ること一月、互に來往して交る。慈庵は土佐の人、儒臣を以て江戸の藩邸に仕ふ。此歳學則を編み家訓を作る。(益軒會編 a 26)	
元祿元(1688)	59	秋七月姪好古及び竹田定直を伴うて京都西行く。此地屬吏二人從僕二人一行都べて七人、風波の爲め備中の下津井より陸行し、藤戸を渡り吉備宮を拜し、五日を閲し、大阪を経て京都に入り、御幸	

		町に宿る。次いで富小路に移る。(益軒会編 a 26-27)	
元禄 2(1689)	60	閏正月京都にあり、出で、丹波、若狹、近江を歴遊し、二月、河内和泉を経て紀伊に遊び、歸後また攝津の島上郡に遊ぶ。 五月二十四日、京都を去り、大阪を経て六月福岡に歸る。(益軒会編 a 27-28)	
元禄 3(1690)	61	春三月秋月に往いて大學經傳を講ず。 夏五月福岡博多の諸寺を歴訪して故實を問ふ。西方の諸郡を巡遊して翌月に及ぶ 秋七月東方の諸郡を巡遊し、一月を経て歸る。(益軒会編 a 28)	
元禄 4(1691)	62	春三月十五日福岡を發し、海路東遊す。東軒夫人及び姪梶川可久從ふ。 大阪に於て國主綱政の江戸より歸るを迎へて謁す。茶壺及び白銀百兩を賜ふ。夏四月二日京都に入る。 夏五月東近江に遊ぶ。 八月朔、京都を發し、閏八月福岡に歸る。(益軒会編 a 28-29)	

元禄5(1692)	63	初めて湯島聖堂へ行き儒学者・林鳳岡と会う。京都で公家と交流。(福岡市博物館・特別展示解説)	『続和漢名数』、『壬申紀行』、『背振山記』
元禄5(1692)	63	主な夕遊観地:書写山、奈良、伊勢、東海道、身延山、江の島、鎌倉(溝口 371)	『壬申紀行』
元禄5(1692)	63	夏四月東行の命あり、白銀五十兩を賜ふ。廿六日海路を取つて福岡を發し、播州に室津より舟を棄て、書寫山に上り、姫路に遊び、處處の名勝を巡覽し、大阪より大和の境を越えて、伊勢の山田に大廟を拜し、更に東行、興津より甲州の身延山に上り、回つて駿河の處々を巡遊し、また江嶋鎌倉を経て五月二十六日江戸に入る。 秋七月十七日江戸を發して京都に入る。(益軒会編 a 29-31)	
元禄6(1693)	64	續和漢名數を編む。(益軒会編 a 31-32)	
元禄7(1694)	65	別府温泉へ行く。徳川光圀よりの依頼で『黒田記略』を編さんする。(福岡市博物館・特別展示解説)	『花譜』、『熊野路記』、『豊国紀行』
元禄7(1694)	65	夏四月往いて豊後別府の温泉に浴す。 冬十一月命あり、大阪を経て京都に入る。(益軒会編 a 32)	

元禄 8(1695)	66	春二月大阪の天王寺に往き、伶人の先容に依り舞樂を觀る。 夏四月京都を去り五月大阪を出で、福岡に歸る。 此齋藤大和巡覽記成る。 (益軒会編 a 32-33)	
元禄 9(1696)	67	主な夕遊觀地:京、奈良、吉野(溝口 371)	『和州巡覽記』
元禄 9(1696)	67	冬十月四日公事あり、寵戸山に上る。適々紅葉の觀最も美なり。此月また伊野及び犬鳴山に遊び、香椎名嶋を涉覽す。(益軒会編 a 33)	
元禄 10(1697)	68	春正月十九日絶句一首を作り、老君光之の壽七十を賀す。 夏五月十一日國主綱政に侍して大禹謨を讀む。(益軒会編 a 33-34)	
元禄 11(1698)	69	春二月請うて京師に之く。東軒夫人を伴ひ、僕四人婢三人之に從ふ。一行都べて九人。大阪を経て先づ大和に遊び、三月京都に入る。是より留ること一年半、之を最終の上洛とす。秋九月往いて有馬の温泉に浴す。(益軒会編 a 34)	
元禄 12(1699)	70	春三月六日大炊御門右大臣經光に謁す。 夏六月京師を去り、大阪より船に上る。風浪の起	



		るに逢ひ、周防の徳山より陸行し、途次山口を過ぎり、渉覧して福岡に歸る。(益軒会編 a 34・35)	
宝永 5 (1708)	79	近郊を旅行する。(福岡市博物館・特別展示解説)	『大和続訓』
宝永 6 (1709)	80	80 歳の長寿を祝う。(福岡市博物館・特別展示解説)	『岐蘇路記』、『大和本草』、『篤信一世用財記』
正徳元(1711)	82	門人らが集まり 80 歳の長寿を祝う。(福岡市博物館・特別展示解説)	『岡湊神社縁起』、『有馬名所記』、『五常訓』、『家道訓』
正徳元(1711)	82	主な夕遊観地:有馬温泉(溝口 371)	『有馬山温泉記』
正徳 3(1713)	84	東軒夫人が没する(62 才)。(福岡市博物館・特別展示解説)	『養生訓』、『諸州巡覧記』、『日光名勝記』

(筆者作成)